

2023年3月26日 礼拝説教要旨

詩編講解説教142「孤独のときにも」

詩編142：2～8、ヨハネ15：14～17

詩編第142編は1節の表題「ダビデが洞穴にいたとき」とあります。この話はサムエル記上第22章のアドラムの洞窟の話、また第24章のエン・ゲディの洞窟の話を思い浮かべることができますが、いずれもサウルから逃れて洞窟に身を潜めるダビデの逃避行の話であります。追い詰められたダビデの心境がここに綴られていると理解することができます。

「友もなく、助けてくれる者がいない」と詩人は嘆いています。サウルの敵意はダビデに向けられていたのであって、その苦しみはやはりダビデにしか分らないものでしょう。孤独の中で一人葛藤するダビデの苦悩があります。人生の問題というのは、最後には自分一人で向き合わなければならないものだと思います。もちろん家族や友人の支えがあります。でも最後にその問題をどう受け止めるのかは自分自身に委ねられています。例えば、病を得ること。身体が老いていくこと。必ず人生にはそういう時が訪れますが、家族はどんなに近くにいても、それを代わってあげることはできません。それはその人自身が負わなければならないことです。またその人にしか分らない痛みや恐れ、不安があります。わたしたちが共感できることには限界があります。家族であれば、その痛みを分かちあいたい、理解してあげたいと思うでしょう。でもやはり本人にしか分らない。どうしても踏み込めない領域があるということも一方でわきまえておく必要があるのです。

この詩人はそういう人間の抱える孤独をダビデの洞窟の話と結びつけています。洞窟というのはまさに闇です。闇は人の存在を消します。自分一人で戦っている、一人取り残されているような感覚になります。でもそこでこそ人は自分自身と向き合い、そしてこの自分をお造りになられた神さまと向き合うのです。自分は何者か。神さまはどのようなお方なのか。人は孤独を嫌がりますが、孤独の中でこそそのことを知るのです。確かにそれは試練であるかもしれませんが。試練のことが多いのですが、神さまはその試練を通してご自身と向かい合うときを備えられています。わたしたちが孤独を感じ「誰も分かってくれない」と嘆く、その時こそ神さまと深く出会う信仰のときであることをわたしたちは心に留めたいのです。

この孤独の中で神さまと向き合うことが「祈り」という形になって表れています。「声をあげ、主に向かって叫び、声をあげ、主に向かって憐れみを求めよう。御前にわたしの悩みを注ぎ出し、御前に苦しみを訴えよう」（2～3節）「御前にわたしの悩みを注ぎ出し」とあります。説教の準備をする中でこの言葉が心に留まりました。カルヴァンは詩編の注解の中で、「われわれの心が悲しみによって押し潰され、言わば窒息している間は、単純、素朴な祈りは、そこから発出することはあり得ない」と指摘しています。つまり、人間は試練の中で神さまに心を注ぎ出すのではなく、むしろ心を押さえてしまおう。だからこそ心の重荷を下ろすことに怠慢であってはならないとも述べています。これは深い洞察だと思います。よくわたしたち信仰者は神さまの前で悩みを打ち明ける、重荷を下ろすと言いますが、本当にこれができているだろうかと考えます。実は自分の中にこれを押し隠しているのではないか。あるいは他のところに気持ちを持っていきこれを忘れようとする。でもそれは自分の中に押し込めて魂が窒息しているような状態なのです。

カルヴァンは『信仰の手引き』で次のように述べています。「祈りは、我々と神とのある種の合意に至る仲裁であって、それによって我々がすべての願い、喜び、うめき、そしてついに心の思いのすべてを神の前に注ぎ出すことであるから、我々が主を呼び求めるとき、我々の心の奥底にまで下って行き、口先やのど元だけの祈りではなく、最も隠されたところから神を呼ぶこと、このことをいつも心がけていなければならない」そのように神さまにすべてを打ち明け、心を開放する祈りが恵みとして与えられていることは何よりの救いではないでしょうか。

この祈りが表されている部分が8節です。「わたしの魂を枷から引き出してください。あなたの御名に感謝することができますように」（8節）「枷」というのは「閉じ込められる場所」という意味があります。ですから「牢獄」という訳もあります。牢獄というのは自力では自分を解放できない場所です。実はそういう中にわたしたちは閉じ込められ、また自らその中に自分自身を押し込めてしまう。それが罪に支配された状態と言えるでしょう。罪の中に捕らわれ、そして自らもそこに自分を追い込んでしまう。でもそこから引き出される。それが祈りであり、またその祈りを可能にしてくださったのがイエス・キリストの救いに他なりません。そのためにキリストはこの世に来られ、わたしたちと同じ人としての苦しみや嘆き、その孤独を経験されました。それがあの十字架で頂点に達します。一人十字架で全人類の罪の重荷を引き受けて死んでくださった。だからどんなに深い孤独の中でもキリストがその傍らにいてくださる。この詩人は「右に立ってくれる友もなく、逃れ場は失われ、命を助けようとしてくれる人もありません」（5節）と訴えています、そうではない。キリストが友になっていてくださる。その救いをこの詩編は指し示しています。

今日の142編を準備しながら、この後歌います讚美歌312番を思い出しました。この讚美歌を作ったジョセフ・スクライブンという人は悲劇の人として知られています。結婚式の前日に婚約者が亡くなり、またその後に出会い婚約した人も病気で亡くなります。最後は自分も病で苦しみ、朦朧とした意識の中であやまって用水路に落ちて死んでしまいました。はたから見れば悲惨な人生と言えるかもしれません。彼自身も深い孤独と嘆きの中にありました。でもこの孤独の中で彼は主に会っていました。友なるイエスに。この讚美歌は、自分の息子が婚約者を続けて失ったことを悲しんだ彼の母のために書いたと言われています。「わたしのことは心配しないでください。わたしは決して孤独ではありません。わたしにはわたしの友となってくださったキリストがいるのです」と。

わたしたちも人生において孤独を経験することがあります。けれどもどのような孤独のときにも主は共におられます。そのために主は一人十字架に向かわれたのです。孤独の極みまで降られ「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（ヨハネ15：15）と言われます。それがわたしたちの慰め、救いです。

天の父よ。孤独を感じるがあります。病を得て、年老いて、一線から退いて、そう感じて嘆くことが多くなります。けれどもあなたが共にいてくださいます。そのためにまことの人となられ、わたしたちのところに来てくださいました。孤独の中で十字架で死んでくださいました。だからこそ心を開いて、神さまにすべてを訴え、祈ることができますように導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。